

海外の先進事例に学ぶ 地域連携の視点

探究学習を通して資質・能力の育成を目指す教育施策は世界的な潮流であり、諸外国においても様々な実践が見られる。そうした国の1つであるアメリカで、PBL（*1）やSTEM教育（*2）を実践する先進校を視察してきた2人の教師に、自身の課題意識に照らし合わせて視察先のどのような取り組みに着目したのか、そして、それらをどのように指導改善に生かしていくのかについて、話を聞いた。

文部科学省では、多様化する教育課題に対応するための新たな視点を
得ることを目的として、海外の教育
機関に現場の教師を派遣する「新時
代の教育のための国際協働プログラ
ム」を実施している。2019年度
に教育テスト研究センターが事業受
託をしたプログラムでは、中学校・高
校の教師9人と研究者2人が、アメ
リカのサンディエゴ及びサンノゼを
訪れ、PBLやSTEM教育などに
関する先進的な教育プログラムを行
う8校を視察した。視察では、「特別
活動、『総合的な探究の時間』（以下、
総合探究）」と教科学習をどのように
結びつけるか、「地域、教育機関、N
PO、民間企業との連携をどのよう
に推進するか」といった観点で調査
が行われ、参加者が視察先の学校の
教師に、自身の取り組みをプレゼン
テーションする機会も設けられた。

本記事では、2人の参加者に、探究
学習の指導における自身の課題意識
とともに、視察内容と視察を通じた
気づきについて振り返ってもらった。

2019年度 新時代の教育のための国際協働プログラム（教員交流）概要

- ◎プログラム目的 教育分野におけるG7・G20各国間の関係強化を図ることにより、多様化する教育課題に対する教育実践の改善に資する
- ◎事業受託団体 特定非営利活動法人 教育テスト研究センター
- ◎派遣者数 中学校・高校教師9人、研究者2人
- ◎派遣先 アメリカ サンディエゴ、サンノゼ近郊の8校
- ◎派遣日程 2019年11月3～9日（7日間）
- ◎調査の観点 ① 特別活動、「総合的な探究の時間」と教科学習をどのように結びつけるか ② 地域、教育機関、NPO、民間企業との連携をどのように推進するか

*詳しい報告内容は、右記ウェブサイトを参照。<https://www.cret.or.jp>

レポート1

「エコシステム」から、学校と
地域をつなぐ術を学んだ
宮城県石巻高校 高橋 就

課題意識

生徒に成長実感を持たせる 外部連携に着目

視察当時、勤務校で「総合探究」
のカリキュラムデザインを担当して
いた私は、視察の調査テーマを「学
習成果を校外に発信する有用性」に
しました。勤務校で職業研究や学問
研究、地域研究などを通して、生徒
にあり方・生き方を考えさせる探究
学習を展開する中で課題に感じてい
たのは、「何を得たか」「どのような
ことができるようになったか」と
いった成長実感が生徒に乏しいこと



たかはし・しゅう
教職歴11年。同校に赴
任して8年目。数学科。
図書情報部。

でした。その要因は、研究発表など
のアウトプット活動が校内の取り組
みにとどまっていることにあり、生
徒にとって、学びの成果を発信した
くなる機会になっていないのではな
いかと思うようになりました。そこ
で、視察先では、外部のステークホ
ルダーといかに連携して対外的な発
表の機会を設けているかを重点的に
調査しました。

*1 Problem Based Learning、あるいはProject Based Learningの略。

*2 STEMは、Science、Technology、Engineering、Mathematicsの頭文字で、STEM教育は、科学・

技術・工学・数学に重点を置いた教育、人材育成のこと。

視察先で学んだこと

学校と地域社会との持続可能な「つながり」の大切さ



写真1 視察先の High Tech High の教師に向けて、自身の勤務校の状況や探究学習の実践についてプレゼンテーションを行う高橋先生。

設、地域などのステークホルダーを学校と引き合わせる役割と、社会からの要望を学校の教育活動に反映させる役割を担っています。

私は、教師だけでは探究学習の推進に限界があると感じつつも、校外の機関との連絡・調整の負担などを懸念し、地域のリソースを十分に活用できていませんでした。SDSE の存在を知り、同じようなエコシステムをすぐに構築できなくても、システムの根底にある「つながり」という発想を持つ大切さに気づきました。

例えば、本校の探究学習では、地域の人は、活動の導入と発表の時だけアドバイザー役として招いていました。そうした一時的なかかわりではなく、継続的に生徒と一緒に問題に向き合い、解決策を考えるといった関係が構築できれば、学校と地域がつながるエコシステムの考え方に近づきます。そして、地域との関係が校内に蓄積されると、担当教師の人脈やアイデアなどに活動内容が左右されなくなるといふよさもあります。

地域連携を生かして学習成果のアウトプットの質を高めている事例からも、多くの気づきを得ました。日本でもそのPBLの実践がよく知られる「High Tech High」(以下、H

TH)では、ゴミ問題を考えるプロジェクト「アースデイ」でのプレゼンテーションとしていました。大勢の人に見られるアウトプットの場合であれば、生徒の意欲は自然と高まるでしょう。それを勤務校の探究学習に置き換えて考えると、校内発表に保護者や地域の中学生、企業関係者などを招いたり、校外のコンテストへの応募を推奨したりと、様々な方法があることに気がつきました。

教科学習は自由な発想でデザイン

視察では、教科学習に探究的な手法を取り入れるための示唆も多く得ました。HTHでは、石けんを作製して販売する化学の授業に感銘を受けました。石けんを作る際に化学式を学ぶとともに、購買意欲を高めるような色やデザインに着目させることで美術の要素を取り入れるなど、教科横断的な学びにもつながっていました。数学では、関数のグラフを作成するソフトウェアでアート作品を作る学びが印象的でした。

それらの学習は、教科の枠組みが比較的自由だから実現できたという



写真2 The Nueva School の工房「i.Lab」は、選択授業やクラブ、個人プロジェクトで利用が可能。多様な生徒や教師がかかわり合いながらデザインや製品を生み出す場だ。

だけではなく、教師のアイデアが強く問われると感じました。私は、教科書の内容をいかに分かりやすく伝えるかに重点を置いて授業づくりをしてきました。今後は、自分のアイデアを生かした授業デザインをし、教科の授業の中でも探究学習を実現させたいと考えています。

ほかにも、「The Nueva School」では、生徒が自由な発想を出し合っ てプロダクトを創造する工房(写真2)を備えていたり、「Millennium School」では、全校で実施する朝の瞑想に教育的な意味を持たせたりしていました。学校に多様な生徒が集まるからこそ実現する学びがあり、学校で教育活動を行う意義を、明確に打ち出す必要性を感じました。

生徒一人ひとりに適した柔軟な活動を模索したい

帰国後、視察先で得た気づきを踏まえ、「総合探究」を中心に次のような活動や仕組みを取り入れていく必要があると考えました。

- 校内発表を複数学年で実施し、研究テーマを後輩へとつなぐ仕組み
- 探究学習の成果を発信する、校外のコンテストへの参加の推奨
- 行政や大学、文化施設など、探究学習に継続的にかかわるステークホルダーの取り込み

それらの計画は、新型コロナウイルス感染症の影響で着手が遅れましたが、どのような状況にあっても、探究学習の本質や必要性は変わらないと捉えています。今後も臨時休業が起り得ることを考えると、一律一斉型の教育活動は学習の停滞を招きかねません。生徒一人ひとりに適した時期を捉え、柔軟な活動を行うことが必要でしょう。

私は臨時休業中にSHR活動を中心にオンライン授業を実施し、登校しなくても実施可能な教育活動があり、学校の中だけで教育活動を完結させなくてもよいのだと気づきました。

た。例えば、ICTを活用して課題や動画を配信し、知識・技能を習得させた上で、対面授業では、協働的に問いを立てて問題解決に取り組むといった反転学習を取り入れたいと考えています。

レポート2

教師がワクワクして学ぶ姿を生徒に見せ続けたい

岡山県・私立岡山龍谷高校 青山睦紀

課題意識

理想的な連携のあり方を先進校の事例に学びたい

本校において、2019年度に担当した特別進学コースの探究学習では、マレーシアの高校生と協力し、現地で日本文化を紹介するフェスティバルを開催しました。その過程では、文化や宗教、制度など、様々な面で壁にぶつかり、思うように進まず苦労の連続でした。そうした経験をした私は、先進的にPBLに取り組むアメリカの学校から、いかに外部と連携して探究学習を深めているのかを学びたいと考えました。

視察先の教師や視察の参加者からも刺激を受け、「とりあえずやってみよう」といった前向きな姿勢になったことも大きな財産です。これからも失敗を恐れず、新たな教育活動を模索していきたいと思えます。



あおやま・むつり
教職歴8年。同校に赴任して9年目。数学科・普通科・情報科教養「eodes」コース長。入試広報課課長補佐。

視察先で学んだこと

地域との持続可能な関係が失敗を学びに転化させる

探究学習の指導で常に課題意識を持つていたのが、どこまで生徒に任せられるかです。生徒主体で進めたいと考えつつ、「連携先の相手に失礼があつてはいけない」「成功させて自信を持たせたい」といった思いから、生徒に任せる前に教師側が段取りを

してしまふ場面が何度かありました。それについて、「High Tech High」(以下、HTH)の教師に「どこまで生徒に任せているのか」と質問しました。すると、「地元企業などと最初に連絡を取るところから、すべて生徒に任せている。失敗しても、それは生徒のためになるから」と明解な回答を得ました。HTHの教師は、「最初の一步こそ大事であり、そこから任せるべき」と強調していました。確かに、仕事では、自分が必要な人を見つけ出し、働きかけることが求められる場合が多々あります。高校時代にそれと似た経験を積むことは、生徒にとって大きなプラスになるに違いありません。

HTHがそうした方針で指導できる背景には、学校を地域に開こうとする意志を持つていいることと、実質的な地域との持続可能な関係性によって、生徒を安心して外に出し、失敗を学びに転化する土壌があるからでしょう。日本でも、学校と地域が連携し、一体となつて子どもを育てるという発想を大切にして探究学習を推進する必要があると感じました。挑戦や失敗の捉え方は、日米の価値観の違いも影響しているかもしれませんが。視察では、シリコンバレー



写真3 High Tech High の取り組みから、生徒の創造性を引き出す仕組みを多く見いだせたという青山先生。同校で勤務校の実践について発表を行った。



写真4 校舎の至るところに生徒たちの作品を展示して、ほかの生徒の発想を刺激している High Tech High。展示方法にも工夫を凝らしていることが伝わってくる。

で活躍している日本人起業家から、スピード重視で失敗を恐れずに挑戦する米国企業に対し、日本企業が遅れを取っている現状などを聞きました。高校時代から挑戦することの大切さを痛感するとともに、授業でも生徒の挑戦心を喚起するような展開を考えたいと思いました。

生徒が対話や思考をしやすい環境を整える

視察では、探究の観点から教科学習を深める手法も学びました。IHでは、数学の授業で、関数のグラフを作成するソフトウェアを使って、生徒がアート作品を作っていました。クリエーティブな活動で学び

の意欲を高め、楽しみながら関数の理解も深めていくのがねらいです。自分の作品で誰かの心を動かすという経験の積み重ねは、世の中を変えらるという姿勢にもつながるでしょう。

視察先の学校には、オープンスペースにホワイトボードが置かれていたり、生徒の作品が展示されていたりと、生徒同士の対話や新たな発想を促す仕組みが随所に見られました(写真4)。勤務校でも、廊下にソファを置いたり、掲示板に生徒の思考を促す問いを書いたりといった試みをしてみようと思いました。

また、教師が動画作成アプリを用いて作成した学習内容を解説する動画を、授業中、生徒個々にタブレット端末で視聴させ、教師は個別指導

に徹する様子も見学しました。私はそれを参考に、4月からの臨時休業中、同じアプリを利用して作成した動画を配信し、生徒からの質問にはオンライン会議ツールで個別に答えるといった授業を行いました。

今後の実践

身近なことを改善する経験が社会課題に取り組む力を育む

帰国後、校外のイベント参加に積極的になった私は、岡山大学主宰の「SDGsユースプロジェクト」(※3)にも有志の生徒と参加しました。

それは、他校の高校生や大学生、社会人とSDGsについて語り合うイベントで、外部のリソースを生かした教育という点では、「エコシステム」の考え方にも通じると思います。

新年度を迎えても臨時休業が続いたため、担任を受け持つ1年生のクラスで、オンラインでの探究学習を週1回、実施してきました。まずは、まだ実際に顔を合わせたことのない生徒同士の関係性を築こうと、好きなことや苦手なことを伝え合わせました。次に、「この状況下で何に困っているか」「それに対して大人はどう対応しているか」「高校生である

自分には何ができそうか」について、個別に考えてから、それぞれの意見をグループやクラス全体で共有する活動を重ねました。そして、社会を変える第一歩として、クラスをよくするためにできることを考え、実行しようと呼びかけました。すると、まず数人の生徒が動き出し、その姿に触発されたのか、活動に参加する生徒は次第に増えていきました。

クラスをよくするという取り組み自体は小さくても、何かをよい方向に変化させた経験は、学年や学校全体、やがては社会の課題に目を向けることへとつながっていくでしょう。その過程で生じる問題を解決する手段として、教科学習にも自然と目が向くに違いありません。

今回の視察では、具体的な手法を学ぶだけでなく、私自身の教師のあり方への意識が変わりました。それまでは、自分の知識や経験の範囲内で教えようとしていましたが、視察先の教師が、自らも学び続ける姿勢を生徒に見せる姿に刺激を受け、帰国後は、様々な情報収集活動やネットワークづくりに努めています。私自身がワクワクしながら学ぶ姿を見せることで、生徒の学びの意欲を引き出していきたいと思っています。

* 3 SDGsにかかわる様々な情報を届けるとともに、全国の高校生をネットワーク化し、活動の発展に結びつけてもらうことを目的に、オンラインセミナーを中心に活動している。岡山大学主宰・ベネッセコーポレーション協力。